1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この9月1日は関東大震災から100年であった。この日、私はちょうど岩手県の三陸海岸のある小さな町にいた。津波にのみ込まれ一瞬で消失した町だった。あれから12年半がたつ。防潮堤ができ、広い道路が整備され、きれいな宅地も広がっている。だが残念なことにそこに住んでいる人はほとんどいない。だっ広い空間の中に道の駅だけがたたずんでいる。

その場所だけみれば、新興住宅地の計画が始動しているのかと思ってしまうそうだ。しかし、12年前のあの悲劇を思えば、いささか複雑な心境になる。復興とは何なのかと思ってしまう。

私のように関西在住の者は、人々が戻り、町が少しずつ昔の様子を取り戻すことが復興だといった気楽に考えてしまう。だが、すべてを失った当事者からすれば、何が復興なのであるか。X この場所を捨ててやり直すという決断もあるだろう。正解など何もないのだろう。

いうまでもなく、日本は世界でもまれな地震大国である。今後、南海、東海、それに首都圏で大地が鳴動する可能性はきわめて高い。とりわけ首都圏大地震が襲いかかれば、想像を絶する事態になる。しかし、30年以内の首都圏大地震の確率70%などといったながら、政府の対策も形だけのものにかみえず、われわれも、巨大地震の接近をできるだけ頭から追い払おうとしている。

確かに、行政的にも個人的にもやれる対策はしれており、A みもふたもない 言い方をすれば、「きたらきたで仕方がないか」ということになるのであろう。首都機能の移転、人口過密地区の人口分散、ビルの建て替え、巨大な防潮堤の建設など、本気でやるべきことはいくらでもあるが、それだけの財政的余裕もなく、法的整備も困難だとなれば、それぞれが、自分で身を守る方策を考えておくほかない。確かに、「きたら仕方がない」という割り切りも、それこそ仕方がないのかとも思う。

この「シカタナイ」が、ある覚悟を伴ったあきらめなのか、それとも単なる思考停止の口実なのかとなると、実はよくわからない。そこでどうせ「シカタナイ」というなら、ある程度、「覚悟を伴ったあきらめ」の方に傾きたいと思う。言い換えれば、そこに何かある種の日本人の独特の心性、精神文化、価値観を刻印したものであってほしいと思う。

1755年にリスボンで巨大地震が発生した。これは、西欧にとっては衝撃的な出来事で、神は世界を完全なものとして創造したとするキリスト教の楽観主義を打ち砕き、近代社会の到来をはやめた、といわれる。

リスボン大地震から強い影響を受けた一人に哲学者カントがいるが、彼はこう述べている。人間は想像を絶する自然の働きのなかに「崇高さ」を感じる。地震だけではない。巨大な暴風、**B 瀑布**、火山の噴火、怒濤（どとう）渦巻く海、これら恐るべき現象は、自然へ向けた「崇高さ」の感覚をもたらす。またそれは、人間に恐怖を与え、人間の無力を思い知らせる。しかしその時、人間は、理性の力によって、この恐怖に打ち勝ち、無力感を克服して、自然の脅威に**テ** **カン然**と立ち向かう。そこにこそ、人間のもつ真の「崇高さ」がある。

このようなことをカントは述べた。人間は、理性の力によって自然の脅威に立ち向かう崇高な精神を持っており、それによって自然より優位にたてる、という。また、東日本大震災のおり、被災地を**テ** **訪モン**したルース駐日米国大使は、「自然は貴重な生命を破壊するかもしれないが、人の精神まで破壊することはできない」といって被災者を励ました。精神があれば、また自然に立ち向かい復興できる、ということである。

このルース大使のいい方はカントを思わせる。共に、崇高な精神こそが、自然の脅威を克服する力を人間に与える、というのだ。人間は、「精神の力」によって自然をコントロールできるという信念がそこにはみえる。

大使の励ましは、日本のメディアでも評判はよかったし、こういういい方が即座にでてくるところに西洋文化の基底をなしているユダヤ・キリスト教の存在を感じたりもする。キリスト教では、神は自然よりも人間を上位においた。その土台の上に、精神（理性）をもつ人間は自らの利益のために自然を管理することができる。こういう考えが西洋文化の核にある。

ところで、東日本大震災の直後に、私は宮沢賢治の「グスコープドロの伝記」を改めて読んでみた。冷害に苦しむイーハトーブの話である。島にある火山を爆発させれば、気温上昇で人々を救うことができる。火山局に勤務する若い技師ブドリは、ある技術を使って火山を人工的に噴火させて人々を救うのだが、そのために自らは噴火の犠牲になる。こういう物語である。

I もちろんあの大地震と津波とは違っているが、いくつかの点で興味深い。

イーハトーブに冷害を引き起こすのは自然であるが、**II** 自然の力が人々を救うのである。火山は巨大噴火によって人間に大きな損害をもたらすだろうが、またその火山によって人は救われもするのである。その自然の力を動かすのは、一人の技師の自己犠牲であった。しかもそれは、特別な**テ** **ゴウ傑**でも英雄でもなく、「普通の人」の淡々とした自己犠牲である。

ここには、自然の暴威などには負けず、立ち向かおうというルース大使の励ましとは、また異なった自然観が横たわっているように思える。日本人にとっては、自然は、山川草木や気象現象から動物や人間までの森羅万象を包括するものであり、**III** 何の意図も計画もなく、おのずから事物を生成し、変化させ、衰退させ、また再生するといった無限の運動なのである。

IV 「自然」は「ジネン」と呼ばれたように、「おのずからある」また「おのずからなる」ものであった。C それゆえそれは人知人力を超えている。

大地から植物が芽生え、成長し、開花し、落葉し、そして枯れて大地に戻る。V 次の年にはまたそれは大地から芽生える。こういう延々と続く循環のイメージがそこにある。そしてまた、これは人のあり方そのものでもあろう。人は人生を終えて大地に戻っても、「魂」は生き残り、また大地に芽生える次の命に引き継がれる。それを可能とするのは、自然のなかに存在する何か「生命」というべきものである。こういう考えが昔の日本にはあった。①

自然のなかには「生命の力」があるがゆえに、自然は、一方では、人を恐怖に陥れる巨大災害をもたらすが、また逆に、大地の恵みや澄んだ大気によって人々の生命に活力を与える。その両者ともに、自然のもつ「生命」の働きであり、昔の日本人は、それをまた「カミ」といつたりもした。②

カントが「崇高な」といった自然の壮大なエネルギーの発動を日本人は「神々しい」と形容し、森の巨木やそびえる山岳や奇怪な岩などにも「カミ」の（王）ケン現を見た。さらに、こういう際立った「カミ」の現出でなくとも、日本人にとっては、「カミ」は、ありとあらゆる場所にひっそりと隠れており、またどんな小さなものにも宿りうるものでもあった。③

それを「カミ」と呼ぼうが、「いのち」と呼ぼうが、ともかく無機質な物質的現象としては捉えられない「生命的なもの」を、日本人は自然のなかに見たのである。しかも、人間もまた、その「自然」のなかで生命を営んでいるとすれば、自然の管理など、人の領分を超えている。こういう考えがかつてはあった。④

今日、われわれはもはやこんな自然観をあからさまに語ることはない。自然災害には理由はあり、それゆえ自然科学的な説明を期待できる。科学の進歩が、自然現象の謎を解き明かす時がくるとみなしている。⑤

表面的にみれば、科学と技術万能の時代にわれわれも生きているのだが、西洋文化のもつ、人間社会に対する自然の脅威や（オ）シヨウ壁に対し、ありとあらゆる資金と人力を投入して立ち向かう強い意志は、われわれには希薄である。それは、私には、日本と西洋の文化の根底にある自然観の違いによるところが大きいように思われる。

日本人の持っている自然観からすれば、人間社会に大きな災いをもたらす自然災害であっても、そこには人間の理解の及ばない自然の働きがあり、だから「シカタナイ」といつて忍従するほかない、ということになろう。その自然への忍従の姿勢は、ある意味で「うまくあきらめる術（すべ）」でもあった。

こういう感覚が、この科学万能時代にあっても、日本人の心の底にまだ残っていても決して不思議ではない。「シカタナイ」は、Y。時としては、日本の自然観がもたらしたひとつの知恵でさえもあるだろう。世界的に自然環境が破壊される現代にこそ、生きたものとして自然をみるという日本の自然観を日本人自身が復興しなければならないのではなからうか。

『朝日新聞』 「異論のススメ」 佐伯啓思

問 1 傍線部（ア）～（オ）に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一

つずつ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は

1

 ～

5

（ア）

1

 カン然

- ① 任務をカン遂する
- ② カン過できない事実
- ③ 胴体着陸をカン行する
- ④ 利益をカン元する

（イ）

2

 訪モン

- ① 専モン家に尋ねてみる
- ② モン句をつけられた
- ③ 波モンが広がる
- ④ 医師のモン診を受ける

（ウ）

3

 ゴウ傑

- ① 限定ゴウ華版全集
- ② 質実ゴウ健の精神
- ③ ゴウ病に苦しむ
- ④ ゴウ慢な態度

（エ）

4

 ケン現

- ① ケン謀術数をめぐらす
- ② ケン著な効果がある
- ③ 一所ケン命の努力
- ④ ケン忍不拔の精神

（オ）

5

 ショウ壁

- ① ショウ算のない試合
- ② ショウ細な説明
- ③ ショウ子に目あり
- ④ ショウ慮にかられる

問2 空欄 に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は

- ① 復興はむろん復古ではない。
- ② 正解は故郷に戻る復古なのだ。
- ③ 故郷に戻りたい気持ちこそ正解だ。
- ④ 昔に戻る復古こそ真の復興だ。
- ⑤ 復古よりも復興こそ正解だ。

問3 傍線部A「みもふたもない」の「ふた」は漢字にすると「蓋」となる。では「み」はどの漢字を使うのが最も適切か。次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は

- ① 視
- ② 未
- ③ 味
- ④ 身
- ⑤ 実

問4 傍線部B「瀑布」は「ばくふ」と読む。この語の意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は

- ① 土砂崩れ
- ② 津波
- ③ 竜巻
- ④ 滝
- ⑤ 爆風

問5 空欄 ～ に入れるのに最も適切な語の組み合わせを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は

①	I	これは	II	また	III	それは	IV	もともと	V	しかし
②	I	また	II	これは	III	もともと	IV	しかし	V	それは
③	I	それは	II	もともと	III	これは	IV	また	V	しかし
④	I	もともと	II	しかし	III	それは	IV	これは	V	また
⑤	I	しかし	II	それは	III	また	IV	もともと	V	これは

問6 傍線部C「それゆえにそれは人知人力を超えている。」の（指示語の内容を明らかにした）意味内容として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は

- ① 永久運動を続けているものなので、天体は人力では止められないものだ。
- ② 不変の存在としてあるものなので、自然は人力では変化させられぬものだ。
- ③ おのずからなる無限の運動なので、自然は人間の知力の及ばないものだ。
- ④ 日本人固有の伝統なので、その自然観は西洋人には理解できないものだ。
- ⑤ 自分の意志で無限運動をしているので、森羅万象は永遠不滅の存在なのだ。

問7 次にあげる文は、本文中から抜き出したものです。戻すべき適切な箇所を、本文中の〔①〕～〔⑤〕の箇所から一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は

しかし、日本人は、本気でそう思っているのだろうか。

問8 空欄 Y に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は

- ① ある覚悟を伴ったあきらめなどではない。
- ② 決して無責任な「敗北主義」ではない。
- ③ 単なる思考停止のあきらめなのだろう。
- ④ 自然に立ち向かう勇気のなさの表明なのだ。
- ⑤ 日本人独特の心性などあまり感じられない。

問9 本文の内容に最も合うものを、次の①～⑥のうちから一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は

13

- ① 関東大震災の当日、今から12年半前、私（筆者）はちょうど岩手県の三陸海岸のある小さな町にいた。
- ② 首都圏大地震の危機に直面しながら、行政的にも個人的にもやれる対策をしていないことが問題だ。
- ③ どんな大規模な自然災害に襲われても、不死鳥のように蘇った過去の日本人の精神力に見習うべきだ。
- ④ 自然を単なる物質としてではなく生きたものとして見る、日本人の伝統的な自然観を復興させるべきだ。
- ⑤ 「グスコープドリの伝記」は、自然を動かす「人間の力」に注目した点で、近代科学の萌芽を感じとれる。
- ⑥ 同じ西洋人でも、カントは哲学で自然を解釈したが、ルース大使は科学者の目で自然を観察している。

2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

西洋の伝統的な世界観・自然観は、何よりもまず神を基本とし、出発点としている。神があるがゆえにこの世界があるのであり、神が創造したがゆえにこの天地万物があるのであった。そうした神の被造物の中で、人間は特別な存在であった。彼は、土から作られているが、神の息を吹き込まれ、神の像（かたち）に似せて作られたものである。人間以外の被造物で、神の息を吹き込まれたものはない。人間を他の被造物と区別するはつきりした一線がここにひかれている。造物主と被造物との間に絶対的な差違があるように造物主の息を吹き込まれた被造物（人間）とそうでない被造物との間にも絶対的な差違がある。また、神が被造物界すべてに^①君臨するように、人間は、それ以外の被造物すべてに対して君臨的な態度でのぞむのである。自然を客体的に見て、研究の対象また利用の手段としてきた西洋人の対自然態度は、けつきよくのところ、ここに由来していると言えよう。

しかも、ここで神というのは、言うまでもなくユダヤ・キリスト教の神である。この神は、A・N・ホワイトヘッドも指摘しているように、絶対の権威であるとともに、首尾一貫した合理性を持つ人格的な神である。気まぐれな専制君主のような、専断的で非人格的な神ではない。その神が創造したものには、したがって、一貫した秩序と合理性があるはずである。そのような秩序と合理性を自然の中に見いださるはずである。そして、これを見いだすことは、とりもなおさず、神のわざを明らかにし、神の深い知恵を知ることである。宗教的にもきわめて有意義な行為である。自然の研究には、『聖書』の研究にも比すべき意義がある。

西洋の伝統的な世界観・自然観は、このようにして、自然を客体的に見、客体的に取り上げるといふ基本的な態度を確立させ、その自然の中に一定の秩序があることを確信させ、そして、それを見いだす努力に対して有形無形の宗教的是認と^②鼓舞を与えるという役割を果たしてきたのである。また近代科学の成立を見なかつたころ、すなわち、まだそのようなものが成立しうるか否かさえさだかでなかつたころ、まして、科学者という職業など考えられもしなかつた時代に、それでも自然の研究に立ち向かって、ついに近代科学の成立をもたらすことを可能にした人々は、およそA右のような世界観・自然観に導かれて活動したのである。

西洋世界における右のような自然と人間の関係は一九世紀に入ってもなお継承されている。一例として、スイス生まれの米国の動物学者ルイ・アガシーの言葉を引用してみよう。

人間は地上における神の最高の被造物である。しかし、……その自然的性質が〔下等動物の〕物質的特性すべてにもとづいていることを知らないと、人間が低落しかつ道德的に^③卑賤になる可能性を持つていることは理解できない。人間をこれらの〔下等動物〕

と区別している^④。天賦^⑤の道徳的ならびに知的資性は、これを活用するも悪用するも彼次第である。

このように、人間を他の被造物と画然と区別する人間観・自然観が行われていたからこそ、一九世紀中葉にあらわれた進化論は西洋人にとっては一大衝撃となったのであった。これによって、彼らの自然と人間に関する見方がどのように変わらなければならなかったかを、E・S・モースは次のように言い表わしている。

進化論という包括的な理論によって、人は、自分が自然界の一部分であるということを^⑥。如^⑦実に思い知らされたのである。これまではそれを、自分とは別個の、自分より下にある事物として研究してきたのであるが。

自然が自分より格段に下位の存在として扱われてきたことが、ここにも明確に認められている。ただし、進化論の出現によって西洋人の自然観が大きな変革をこうむったことは事実であるが、しかし、それがここで根底から変わってしまったかのように思うのは早計である。

自然を伴侶とし、自然の中に没入し、自然とひとつになろうとする日本人の伝統的な自然観は、西洋人のそれとは著しく趣きを異にしている。西洋人のそれからは、例えば、

朝顔に釣瓶（つるべ）とられてもらい水（注1）

というような俳句は決して出てはこなかったのである。彼らの場合にはむしろ、これによってそのB風流心をほめられるどころか、井戸が故障したわけでもないのに早朝から水をもらいにきて他人の生活の妨げなどするのは、困った隣人であり、市民として失格であるということになったであろう。

日本の自然観は、日本独特の美しい文化や生活様式を生み出してきたが、それは、近代科学や近代科学技術を生み出すような自然へのアプローチとは程遠いものであった。地震学の成立史を見れば、この点はきわめて明らかである。古来この国に地震は数かぎりなく発生したけれども、ついぞ日本人の手によって地震学というべきものは生まれなかった。古くは鴨長明の『方丈記』（一二一二年）に見られるように、この著者は、火事、地震、つむじ風（台風）、洪水、旱魃（かんばつ）、飢饉、悪疫の流行などの自然の災害と、人の世の栄枯盛衰を教えあげて世のはかなさを述べながら、けつきよく、人里離れた所に庵りを結んで、自然の懐に入ることに住の道を見いだすのである。「ただ糸竹花月を友にせんにはしかじ」と彼は書いている。

X もちろん、鴨長明の場合には、きわめて逃避的で悲観的な当時の仏教的人生観の影響も少なくないであろうが、それが続発する天変地異と結びつけられたというだけでなく、さらに、

その解決もまた、こうした天変地異をもたらしたその同じ自然の中に安らぎを見いだすという形で求められていくのである。典型的に日本的な自然との接し方である。

このような自然とのかかわりあいには、明治・大正期を迎えても基本的には変化していない。この『草枕』の主人公もまた「住みにくい」「人の世」からの活路を山里に求めたのである。

さらに、清水幾太郎氏によれば、関東大震災のときの人々の反応も、鴨長明のそれに通じるものがあつたという。家を焼かれ、家族を失った人々も、やがて地震が静まり、焼跡の大地に坐つて、夕日が西の空を真赤に染めて沈んでいくのを見てみると、もうそこに言いようのない安らぎを感じてしまうのである。同氏が書かれたように、こうして日本人は、人間を破滅させる「荒々しい自然からの救済」を「美しい自然への没入のうち」に見いだしてきたのであり、「暴力によって突き倒された人間が美としての自然によって救い上げられる」という循環の軌道を歩み続けてきたのであつた。この循環からは地震学は生み出されるべくもない。いかに頻繁に天災がこの国土を襲つても、「天災は忘れたころにまたやって来る」(乙)ということになるほかはなかつた。さらに極端な言い方をするならば、いくら天災が続発しても、日本人がそれを忘れる速さに追いつくことはできないのであつた。地震や台風を科学的に研究してそれがどのように起こるかを明らかにし、これによって今後の災害を免れる方法を見いだそうとするような組織的な活動は生まれようもなかつた。

それにもかかわらず、この日本で地震学の成立と発展を見たのは、明治初期に渡来した外国人教師たちが、日本でみずから地震を経験することになったからにほかならない。自然を研究と利用の対象として客体的に見る彼らは、地震という自然現象に出あうと、即座に、そのゆれ方を計測する地震計を作るなどしてその研究を開始し、また、日本地震学会を創設し、機関誌を発行して、研究を促進する体制を整備していったのである。

筆者が米国に滞在していたとき、同じ大学に研究に来ていた日本人の植物学者が筆者をドライブにつれていってくれたことがあつた。同じドライブでも彼のそれはアメリカ人のところも違うものかと、そのときつくづく感じたことであつた。ハイウェイを一気に突っ走って目的地に着き、一休みしてまた全速力で戻ってくるというのではなくて、彼は、旧式の車を駆って曲がりくねった田舎道を静かに走る。米国にもこんな風情のあるところがあつたのかと、思いがけない再発見をさせてくれる。走りながら彼は、農家の庭先にある樹木を指さして、春になるとういう花が咲くのですよと説明する。そのうち、前方の道路上に大きな蛾が一羽舞つているのが見えた。筆者が予想したとおり、彼はブレーキを踏んで車の速度落とし、蛾が行つてしまふとまたそのスピードにもどした。翌日この蛾の話と同僚のアメリカ人教授にしたところ、彼は即座に、「そうだとも、蛾がフロントガラスにぶつかつたら、あとの掃除が大変なもの」と答えた。C あいた口がふさがらぬとは、こゝろの気持ちというのだろうと思つた。「朝

顔に釣瓶とられてもらい水」のD現代版ともいうべきこの話は、このアメリカ人教授には全く通じないのであった。日本的な自然観への関心も、また、そのころ米国で盛んになり始めた自然保護への配慮も、彼の眼中にはまだ少しもないのであった。

米国に來ている日本人の研究者（おもに自然科学系等の人々）とよく話題にしたことのひとつは、われわれは日本に固有な伝統的要素を活かして科学の創造的な発展に寄与することができであろうかという問題であった。話し合ってみると、**I**な結論ばかりであった。ある友人などは、**II**に述べて、近代科学の**III**な体系が発展していく様子を近代建築を建てるのにたとえれば、その中で**IV**な要素が独自性を發揮して寄与するのはせいぜい室内装飾の程度ではないか、と言っていた。残念ながら、筆者自身にもそれ以上に**V**なことを言う自信はなかった。

ところが、そのようなときに偶然にも手にすることになったひとつの論文には、もっと希望的な見とおしが示唆されていた。それは、上智大学で人類学を教えている、シカゴ大学出身のジョン・フリッツシュ博士が書いた「現代人類学に対する日本の寄与」（一九六三年）という英文の論文である。その中でこの著者は、日本の人類学者が猿と猿の社会に関する最近の研究でひじょうにすぐれた貢献をしたと評価し、しかも、日本人研究者のアプローチには西洋人研究者に真似のできないような特質があるからこそ、そのような成果を上げることができたのだと指摘しているのである。

研究者たちは、一定の場所に餌を置いて野生の猿の行動を観察するわけであるが、その前に、いったんこれらの猿を捕えて番号をつけ、それから放してやって観察を開始するというのが、従来の西洋式のやり方であった。ところが、日本の研究者の場合には、猿に番号をつける必要がない。相手が数十匹いようと、おのおのの顔かたちから動作、性質などを見て、見分けがつくというのである。しかも、面白いことには、それぞれの猿に、例えば日吉丸だとか写楽だとか、その性格や顔つき、からだつきに合った親しみのある名前をつけている。そして、こうした名前を、あとで番号に改めることもせず、そのまま研究論文の上にも登場させている。これには西洋の研究者たちはすっかり驚いた。それは、彼らには想像もできないことだったのである。

フリッツシュ氏はさらにこう書いている。西洋の学者たちがこれらの動物を見る態度は、どちらかと言えば、顕微鏡下にバクテリアを見るあの態度と同じである。これらの動物を彼らは、自分の前にある対象、客体として見るのである。ところが、日本の研究者たちは、個々の猿に対してはるかに個人的な親近さをもっている。おのおのに名前を与えるのみならず、その生い立ちや性格についても実によく知っている。それがこのたびの成果を生んだのであって、これは、日本人の固有な要素が西洋科学と結びついて見事な結果を収めた著しい事例である。日本

人がもっている自然へのこうした親近さというものが、今後とも、自然を観察してその秘密を解明していくうえで独特な寄与をすることが期待されると、フリッシュ氏は結んでいる。

右の事例は、彼此の自然観の相違を具体的に例示し、かつ、日本の自然観が科学の進歩に独自の積極的な貢献をなしている場面があることを示唆した、実に興味ふかいものであると言えよう。そして、実際、その後、アフリカのゴリラや、「生きた化石」と言われるほど貴重で原始的な沖縄のイリオモテヤマネコの生態の研究などで、日本人研究者は右の特性を十二分に發揮しているのである。近代科学の本格的な導入を開始して以来百年、日本人もやっとここまで来たのだと言えるのかもしれない。そして、この事例で貴重な役割を果たした日本人研究者の動物に対する態度については、一二世紀の『鳥獣戯画』（注2）に見られるあの日本的動物観に通じるものがあると言っても誤りではないであろう。

『日本人と近代科学』 渡辺正雄

- (注) 1 江戸時代の加賀千代女(ちよじよ)の代表句。朝顔の蔓(つる)が釣瓶(井戸の水をくむ桶(おけ))に巻き付いてしまったので(蔓を切るのがかわいそうなので)(隣の家)に水をもらいに行った

- 2 京都の高山寺に伝わる絵巻物・国宝 兎や猿を擬人化して描いている

問 1 傍線部①～⑤の漢字の読みとして間違っているものを、次の①～⑤の中から一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は 14

- ① 君臨 くんりん ② 鼓舞 こぶ ③ 卑賤 ひせん ④ 天賦 てんぷ ⑤ 如実 じょじつ

問 2 傍線部 A 「右のような世界観・自然観」の意味として最も不適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は 15

- ① 自然を研究と利用の対象として客体的に見る揺るぎない態度。
② 神を基本とし、神が天地万物を創造したとする確固たる信念。
③ 人間を他の生きものとはっきりと区別する特権階級的意識。
④ 秩序ある神が創造したのだから自然にも秩序があるとする確信。
⑤ 自然を伴侶とし、自然と一体になろうとする伝統的な観点。

問 3 傍線部 B 「風流心」の意味として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は 16

- ① 諷刺精神に満ちた心
② 自然の動きに従う心
③ 動植物を俳句に詠む心
④ 俗世間を離れた心
⑤ 風土や流行に従う心

問 4 空欄 X に入れるのに最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は 17

- ① 美しい自然を絵に描きながら暮らすのである。
② 文武両道を座右の銘として生きるのである。
③ 音楽と自然を伴侶として生きるのである。
④ 弓道と剣術を体得し、自然と一体となるのである。
⑤ 自然の中で宗教的な生涯を全うするのである。

問5 空欄[甲]には有名な明治の文豪、[乙]にはその弟子で俳人・地球物理学者が入る。それぞれの空欄に入れるのに最も適切な人名を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一人ずつ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は甲 [18] 乙 [19]

- ① 森鷗外
- ② 夏目漱石
- ③ 芥川龍之介
- ④ 寺田寅彦
- ⑤ 湯川秀樹

問6 傍線部C「あいた口がふさがらぬ」の意味として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は [20]

- ① あきれ返って物が言えない
- ② 驚きのあまり口がきけない
- ③ 軽蔑のあまり吐き気がする
- ④ 感動するあまり我を忘れる

問7 傍線部D「現代版ともいうべきこの話」で、なぜ「この話」が「朝顔の句」の「現代版」と言えるのか。その理由説明として最も適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は [21]

- ① 共に、伝統的な日本人の自然観だけに縛られない、西洋的現代的自然観が見て取れるから。
- ② どちらも伝統的な日本人の古い自然観に囚われない、斬新な自然観が感じられる例だから。
- ③ 日本と西洋とを止揚するような、地球全体を視野に入れた新たな思想が垣間見られるから。
- ④ 人間と野生の生物とを区別せずに、同一のものとする一体感が終始一貫して見られるから。
- ⑤ 自分(人間)の都合より、自然の命を大切にするとところに共通の日本的な自然観があるから。

問8 空欄 I ～ V に入れるのに最も適切な語を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ

選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。（選択肢重複使用不可）

解答番号は I II III IV V

- ① 積極的
- ② 悲観的
- ③ 日本的
- ④ 比喩的
- ⑤ 学問的

問9 問題文 1 と 2 の内容に関する説明として、最も不適切なものを、次の①～⑦のうちから一つ

選び、解答用紙の所定の箇所にマークしなさい。解答番号は

- ① 1 文も 2 文も、西洋の根底にユダヤ・キリスト教に基づいた自然観があるとしている。
- ② 1 文は、自然の災害を人間の科学の力よりも、自然の力で回復した例を挙げている。
- ③ 2 文は、自然の痛めつけられた人間が、美しい自然によって慰められる例を挙げている。
- ④ 1 文は、既に失われてしまった日本人の自然観を復興すべき具体的対策を講じている。
- ⑤ 1 文は、西洋人の自然観を揺るがした例として「リスボン大地震」を挙げている。
- ⑥ 2 文は、西洋人の自然観を揺るがした例として「進化論」を挙げている。
- ⑦ 1 文も 2 文も、西洋人と日本人の伝統的自然観を対立概念として対照的に論じている。